

おせっかいな神々

星 新一



新潮

おせっかいな神々^{かがみ}

定価 280 円

新潮文庫 草 98 R

昭和五十四年五月十五日 印刷
昭和五十四年五月二十五日 発行

著 者 星^{ほし} 新^{しん} 一^{いち}

発 行 者 佐 藤 亮 一

発 行 所 株式 会社 新 潮 社

郵便 番号 一 六 二
東京 都 新宿 区 矢 来 町 七 一
電話 業務 部 (〇三)(二六六)五一一
編集 部 (〇三)(二六六)五四二
振 替 東京 四 八 〇 八 番

且丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛ご送付
ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

新 潮 文 庫

おせっかいな神々

星 新 一 著



新 潮 社 版

2535

目

次

笑い顔の神	九
現代の美談	一四
サービス	一九
魔法使い	二七
奇妙な旅行	三五
出来心	四三
問題の男	五一
非常ベル	五九
古代の秘法	六三
死の舞台	六八
マスコット	七二

税金ぎらい	八四
隊員たち	八九
指紋	九七
権利金	一〇〇
保護色	一〇六
夜の声	一一〇
機会	一二五
箱	一二九
魅力的な薬	一三七
未知の星へ	一四一
夜の事件	一四七

歴史の論文	一五三
重要なシーン	一六三
商売の神	一六七
四日間の出来事	一七六
愛の指輪	一八一
効果	一八五
協力者	一九四
狂気と弾丸	二〇〇
天罰	二〇八

無表情な女	二二三
ささやき	二三〇
午後の出来事	二三六
夜の召使い	二三五
三年目の生活	二四一
すばらしい銃	二四八
そそっかしい相手	二五三
伴奏者	二五七
敬服すべき一生	二七〇
解説 中島 梓	
カット 真鍋 博	

おせつかいな神々

笑　い　顔　の　神

むかし、あるところに小さな村があつた。村人たちの暮しは平穩無事。だれもかれも、可もなく不可もないといったところだつた。そして、そこに住むひとりの男。彼は、

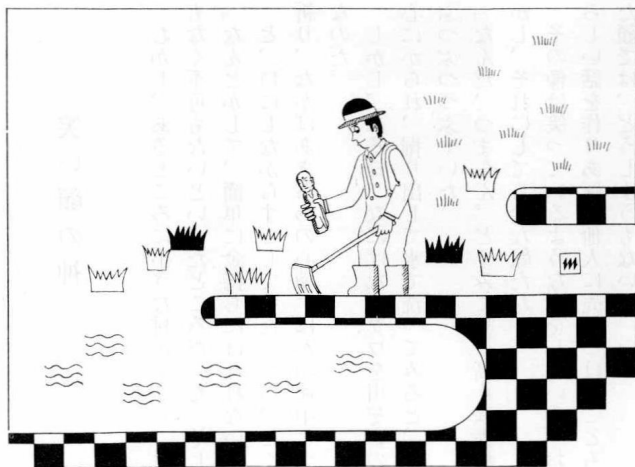
「なんとかして、簡単に金持ちにはなれないものだろうか」

と、口にしながらすごしていた。だが、とくに怠惰であつたわけでもない。要するに、なかば祈り、なかばあきらめの心境。ほかの連中と大差なく、毎日の畑仕事をつづけていただけのことなのだ。

しかし、ある日。なにげなくクワを川ぞいの地面にうちこむと、妙な手ごたえがあつた。好奇心にかられ、掘り出して水で洗ってみると、木でできた小さな像とわかつた。男は眺めながら、ぶつぶつぶやいた。

「なんだ、つまらん。どうみても、高くは売れそうにない。たきつけにでも使うとしようか。しかし、それにしても変な顔だな」

その像は笑っているような顔をしている。おごそかとか、ありがたみがある顔なら、もっともらしい話を作りあげ、他人に売りつけることもできるだろう。だが、無邪気に喜んでいった顔では、どうしようもない。



その時、どこからともなく声がした。

「けしからん。たきつけにするとか、変な顔だなどと言うとは……」

男はまばたきをし、あたりを見まわした。しかし、それらしき人影はない。話の内容からすると、これに関連がありそうだが。目を手に持った像に移すと、ふたたび声がした。

「そうだ。わしの声だ」

「これは驚いた。こんな木の像が声を出すとは」

「わしがこの像に宿っているといってもいいし、この像がわしの化身だといってもいい。つまり、像はわしであり、わしは像なのだ」

「なんだかよくわかりませんが、あなたが像であるらしいことはわかりました。しかし、あなたはいったいなんなのです」

「わしは神だ」

男は疑わしげに言った。

「ご自分で神と主張なさるのは勝手ですが、こんな木の像がね……」

「おろかなやつだな、おまえは。ただの木の像なら、長いあいだ土のなかに埋っていたら、腐ってしまったはずだ。なんだったら火にくべてみる。決して燃えない。わしが神である証拠だ」

そういえばそうかもしれない。男はうなずき、同時に日ごろの願いを思い出した。それがかなえられるかもしれない。だめだとしても、もともとだ。やってみる価値はある。

男は家に持ち帰り、床の間にていねいに安置した。そして、うやうやしく願いごとをのべた。

「神さま。なにとぞ金もうけをさせて下さい」

「よし、まかせておけ」

神さまは即座に承知してくれた。さては福の神だったのか。だが、いささかあつさりし過ぎている。どうも信頼感が高まらない。男はあまり期待をかけないことにした。

まもなく収穫期となり、また台風も訪れてきた。しかし、なんという幸運。男は一日だけ早く取り入れをすませていた。彼は災難をまぬかれ、他の村人たちは大なり小なり、被害をこうむった。

これがきっかけとなり、すべてが好転しはじめた。村人たちは男に金の融通をたのみ、男は高い利息を取って貸した。金がもうかりはじめたのだ。最初は少しずつだったが、しだいに大きく……。

男は神さまに報告した。

「おかげさまでいべきなのでしょう。財産がふえつつあります」

「もちろん、わしの力だ」

「お力を認めます。で、お礼になにをいたしましょうか」

「そんなことは気にしなくていい。しかし、どうだろう。ほかの人たちにも、わしをおがませてやったら」

神さまは提案したが、男はあわてて手を振った。

「とんでもありません。いやですよ」

「そうだろうな。そのほうがいいかもしれない。わしが前にいた家でもそうだった」

「それは知りませんでした。そこでも金をもうけさせたのですか」

「いうまでもない。それがわしの楽しみなのだから」

男は安心し、また心配もした。神さまの力の効能に関しては安心し、前の所有者のように紛失してしまふことに関しては心配したのだ。そこで、神さまを床の間から、新しく建てた蔵の中へと移した。これなら盗まれることも、他人に拝まれることもあるまい。

かくして、男の財産はますますふえた。貸した金の利息はつぎつぎに入ってくる。また、村へ入ってくる商品の販売も独占することができた。これでも大いにもうけた。決して損をすることはない。なにしろ、神さまがついている。

男は神さまの前にひれ伏して言った。

「すべて、あなたさまのおかげです。この一帯の畑も山林も、なにかも手に入り、わたしは長者と呼ばれるようになりました」

「わしも喜んでゐるよ」

神さまの像は、あの笑ったような顔で答えた。

「ありがたいことでございます。福の神さまの実力が、こんなにも素晴らしいものであるとは、わたしも知りませんでした」

「どうも、なにか勘ちがいをしているようだな。力がすばらしいことはたしかだが、わしはおまえが考えているような福の神ではないぞ」

「ご冗談をおっしゃってはいけません。これだけの福をお与え下さった。福の神でなければ、なんなのでございますか」

「なんだと思う」

「わかりません。しかし、いずれにせよ、ありがたい神さまです」

男は笑いがとまらぬといった表情で言った。神さまの像も、いつもの無邪気な笑い顔で告げた。「貧乏神だ。人びとが苦しみながら貧乏になってゆく。それを見物することが、なによりの楽しみなのだ。だが、じゅうぶんに味わって満足したから、そろそろお別れだ。これ以上味わおうにも、村人たちはもうどん底だ。まもなく、連中が一揆をおこして押しよせてくる。この家は荒らされ、わしはがらくたといっしょに、川へ捨てられるだろう。つぎにはどんなやつが拾うか、それを想像すると面白くてたまらない」

現代の美談

K氏はある会社につとめ、いい地位にあった。子供はなかったが、愛する美しい妻があり、あるていど余裕のある生活をしていた。あまり変ったところもない、ふつうの中年の男だった。

変ったところを特にあげるとすれば、家を出てから近所の公園に立ち寄ることぐらい。毎朝、出勤前にその公園のなかをひとまわりするのが、K氏の日課となっていた。運動不足になりがちなのをいくらか補えるし、それに、気分もすがすがしくなる。

しかしその日は、すがすがしいとは呼べないような事態が、公園のなかで待ちかまえていた。散歩をしているK氏に、ベンチにすわっていた青年が、立ちあがって話しかけてきたのだ。

「失礼ですが、Kさんですか」

「ええ。しかし、あなたは。そして、なにか用事でも」

「あなたにとつては、あまり喜ばしくない用事です」

「いったい、なんのことです。はっきり言って下さい」

「はっきり言いにくいことなのですが、はっきり言いましょう。これからあなたを殺すのです」

「なんだと。気はたしかなか」

大声をあげかけるK氏を、青年は制した。服のポケットから拳銃けんじゆうをちよつと出し、すぐにもと

に戻した。そして、ポケットに入れたままで、K氏のからだに押しつけた。

「あまり大声を立てないで下さい。これは音の小さい新式の拳銃です。引金をひけば、弾丸があなたの魂をからだから押し出してしまいます」

そのようすは冗談とも思えなかった。

「いま、ここで殺すつもりなのか」

「あなたが逃げようとなさると、そうなります。しかし、わたしとしては、もう少しお待ちしたい」

「という意味は……」

「できれば自宅にもどって、そこで死んでいただきたいのです」

「なんとということだ。家には妻がいる」

「その奥さまの目の前で殺すようにと、依頼されているのです」

「そんな残酷なことを考えたのは、だれだ。しかも、理由もなく」

「どうせ死んでいただくのですから、お話ししてもいいでしょう。あなたの会社から製品をまわしてもらえなくなったため、ある商店が破産し、その経営者が妻の目の前で飛込み自殺をいたしました。つまり、営業の責任者であるあなたに殺されたことになるそうです。そこで、その未亡人は復讐を誓った。賃仕事をして金をため、同じような状態であなを殺すべく、わたしを雇ったというわけです。現代の美談ですね。こんな感心な婦人は、めったにいるものではありません。わたしも安く引き受けました」